あんたいとる通信 #01

「あんたいとる通信」は今号から始まるコーナーである。コーナーの趣旨について簡単に説明したい。

「あんたいとる通信」は、Antitled 友の会会員が、論文にならないような「小ネタ」や時評、ちょっとしたエッセイ、研究生活ライフハックなど、様々な小文を載せることを目的とするコーナーである。当初は、会員制度を開始した際の会員特典とするつもりであったが、主に銀行口座開設の困難によって会員制度開始が難航しており、本会では先んじて「あんたいとる通信」を始めることとした。

この名前にしたのは、「Antitled」の読み方が雑誌内で明記されておらず、「アンタイトルド」と誤読されることが多いため、最後の “d” を読まずに「あんたいとる」と読むことを示したかったのと、他誌にみられる比較的柔らかい雰囲気の短文を載せるコーナーにしたかったからである。字数は 400 字〜2000 字程度と考えている。

今号は編集委員のみの企画にするつもりであったが、Antitled 友の会大会の運営委員である若山憲昭氏がこの企画の存在を聞きつけ、さっそく投稿の申し出があったため、寄稿していただいた。次号までに会員制度を発足できていることを祈って、「あんたいとる通信」の趣旨説明とさせていただきたい。（M.T）

行政職から学芸員への転職

——Antitled 友の会との関わりの中で

若山 憲昭

近年、私は 10 年以上にわたり行政職として勤務した自治体 A を退職し、学芸員として自治体 B へ転職した。行政職から学芸員への転職は必ずしも一般的とは言えないが、その過程にはいくつかの契機があった。

先日、Antitled 友の会の運営に関わる方々と話す機会があり、その中で私の転職経験が話題となった。文章としてまとめてはどうかとの勧めを受け、ここに経緯を記すこととした。

私は大学院修士課程まで在籍し、日本史学を専攻した。修了後、自治体 A に行政職として就職した。学芸員を志望しなかったわけではないが、採用の門戸が狭い現状に加え、勤務の傍らでも研究は継続できると考え、まずは行政職としての道を選択した。

就職後は概ね 2〜3 年周期で異動を経験した。公務員の異動はしばしば「転職に等しい」と言われるが、実際に経理から福祉、産業労働へと、分野の異なる部署への異動を繰り返した。異動は多くの場合、3 月下旬に内示され、短期間で引き継ぎを済ませ、4 月から新たな業務に従事する。新しい職場で一通りの業務に習熟するには 1 年程度を要するが、慣れた頃には次の異動が視野に入る。こうしたサイクルが繰り返された。

希望部署への配属は稀であり、時には負担の大きい部署に就くこともある。私自身、年度途中に突然、1 週間後の福祉系の部署への異動を命じられ、異動先で辛酸を嘗めたことが 1 度ならずあった。こうした環境の中で、専門性の蓄積やキャリア形成の見通しが立ちにくいことに、不安を抱くようになった。

一方で、行政職として勤務する傍ら、余暇を利

用して大学院の史料の輪読会に参加し、博物館の展示にも継続的に足を運んだ。これらの活動は精神的な支えとなるとともに、次第に学芸員への転職を志向する契機ともなった。

大きな転機の一つは、Antitled 友の会における大会報告である。従来より継続してきた中世前期の上賀茂神社の社司組織に関する研究を報告し、諸氏の助言を得て、論文にまとめ、『Antitled』に掲載されるに至った。この経験は自身の研究を一定の形として公表し得たという点で、小さくない手応えとして残った。

もう一つの転機は、観光系の部署への異動である。自治体 A は戦国時代を前面に押し出した観光施策を展開しており、この部署において初めて、自身の日本史の知見を実務に活用する機会を得た。しかしながら、業務の多くは専門職や学芸員の裏方的役割にとどまり、専門的立場から主体的に関与できないことへの不全感も次第に大きくなった。その後の異動も相まって、学芸員への転職を決意するに至った。

勤務の傍ら、条件に合致するいくつかの学芸員募集に応募した。多くの自治体では一次試験として教養試験や SPI を採用しているため、勤務終了後に図書館に通い、市販の問題集を解いて対策を行った。

採用試験の内容は自治体によって異なるが、教養試験・専門試験・論文・面接・集団討論等の組み合わせが一般的である。とりわけ面接は重要であり、面接官には行政職員が含まれる場合が多い。そのため、近年の文化観光推進法の施行や博物館法改正により、博物館が文化観光の拠点として位置付けられている現状を踏まえておく必要がある。これらの政策には議論もあるが、現在の博物館行政を考える上で無視できない要素であり、自分なりの考えを持っておくことが求められる。

振り返ってみると、行政職としての経験を、学芸員の業務とどのように結び付けて語れるかが一つの鍵であったように思う。学芸員の活動をいかに地域へ還元するかという視点は、採用試験に限らず、その後も考え続けるべき課題である。

以上、行政職から学芸員への転職経験を概観してきた。やや迂遠な経歴であるが、行政職としての経験は決して無駄ではなかった。むしろ、その経験をいかに学芸業務と接続し、自身の言葉で語るかが重要であったといえる。

とはいえ、実務経験を欠いた状態で採用試験に臨むにあたって、研究業績が一定の役割を果たしたことも否定できない。私にとって、Antitled 友の会での大会報告や論文掲載は、その一助となった。振り返ってみても、これらの経験の意義は大きかったと感じている。学会報告や論文掲載には一定のハードルがあるが、Antitled 友の会は多様な報告・投稿形式を備えた開かれた学会である。行政職のみならず、学芸員を目指される方で、成稿化できていないネタと熱意がある方は、参加・報告・投稿を検討する意義は小さくないのではなかろうか。

河内国葛井寺御開帳の起源

田中 誠

新刊チェックとして『大日本史料』第六編之五十一をめくっていたところ、次の史料に行き会った。

「細々要記」永和 3 年（1377）10 月条（『大日本史料』第六編之五十一所収第六編之五十補遺：35）

一、葛井寺ヨリ寺僧一人ノホル、状トシテ

〇来(為当寺院修造)十一 月十八日ニ本尊ノ御帳ヲ開ムト存ス、可蒙御許可哉云々、被許可了、委如別記之、自昔未聞開跡云々、

同十一月条

一、葛井寺御帳、十五日ニ開之由、状トシテ申之、

本史料にみえる「葛井寺」とは、大阪府藤井寺市にある葛井寺のことである。同寺は聖武天皇勅願の由緒を持ち、奈良時代の国宝千手観音座像（本当に手が千本ある）を有する河内有数の古刹で、現在では毎月 18 日観音の縁日に開帳しており、多くの人でにぎわっている。

中世の葛井寺は剛琳寺とも呼ばれ、鎌倉から南北朝に成立したとされる西国三十三所観音霊場の一つにもなり、現在も札所である。南北朝期、葛井寺周辺はしばしば南北両軍の戦場となった。長禄 2 年（1458）以降、葛井寺および周辺の岡村荘は、奈良興福寺東金堂が本寺・領主となり、在地武士の岡村氏が寺に乱入する事件が起きている（藤井寺市史通史編 1）。

改めて上の史料に戻ろう。この「細々要記」は興福寺東金堂の金勝院実厳（禅実）が記した記録であり（徳永 1998）、近年東京大学史料編纂所の所蔵となったものである（本郷他 2023）。

上の史料からいくつかの点を指摘できる。①葛井寺の本寺が興福寺東金堂であるということが、南北朝期にさかのぼることである。葛井寺の僧が尋ねた先は実厳であり、葛井寺修造の許可を取りに来たのである。

②永和 3 年（1377）に葛井寺修造のための開帳が企画され、当初は 11 月 18 日を予定していたが、結局は 11 月 15 日に変更になったこと、詳細は別記があったこと（詳細不明）、そしてこれ以前の開帳は聞いたことがないということである。もう少し背景を探ってみたい。

まず気になるのは、なぜこの時期に修造が始まったのかという点である。前述の通り、葛井寺周辺は南北朝内乱で戦場となった。特に激しかったのは貞和 3 年（1347）の楠木正行対細川顕氏の藤井寺合戦であろう。また「葛井寺文書」には正平 9 年（1354）の軍勢らの煩いを止める後村上天皇綸旨が残っており（藤井寺市史通史編 1）、しばしば合戦による損害を受けたと思しい。

これに加えて指摘したいのは、正平 16 年（1361）の大地震である。この地震では摂津四天王寺など畿内で甚大な被害が出た（『大日本史料』第六編之二十三:629〜）。葛井寺近傍の通法寺でも堂宇が倒壊する被害が出ており（『羽曳野市史』史料編 3、141 号）、葛井寺も無傷ではなかったと思われる。

このように南北朝後期の葛井寺は相次ぐ戦乱と地震により荒廃していたと推測される。四天王寺は地震の 4 年後正平 20 年（1365）に南朝主導で金堂上棟が行われたが、南朝のおひざ元であった河内は、重臣楠木正儀が応安 2 年（1369）に北朝に寝返ってしまい、南朝の支配は及びにくい状況にあった。南北両朝からの保護は期待できず、国内の寺社の復興は遅れていたのではないか。そこで、葛井寺は堂宇復興のため本寺東金堂に寺僧を遣わし、本尊を開帳することにしたのではないだろうか。

こうした開帳は、南北朝期になって見え始め、その賽銭収入はかなりの高額に上り、造営費に充てられたといい、地域的には畿内近国の事例が多いという（新城 1964：589）。葛井寺の事例は、修造のための本尊開帳としても初期の例であるといえそうである。

最後に永和 3 年の開帳で、予定が 11 月 18 日から 15 日に変更されていることについてみておきたい。

開帳の日について、近世幕末に作成されたという「葛井寺年譜帖」をみてみよう。本史料によれば、近世の開帳は葛井寺で本尊などを公開する居開帳が 11 回、各地で本尊などを公開する出開帳が 9 回の計 20 回行われたという。「葛井寺年譜帖」に初めての開帳と記録される天和 3 年（1683）では 2 月 25 日〜4 月 15 日、2 回目元禄 9 年（1696）では 2 月 18 日〜7 月 18 日と、これ以降も基本的に数十日にわたるものであった。日付は現在の式日で観音の縁日である 18 日の開始・終了が多いが、固定ではなく 3、5 のつく日も多い（藤井寺市史通史編 2：671〜、961）。

永和度開帳の 18 日・15 日という日付が、近世においてもしばしば共通する点は興味深い。また「葛井寺年譜帖」では天和度が開帳の初度とのことだが、本史料の登場で初例は一気に 300 年ほどさかのぼる可能性が高いことがわかった。葛井寺の開帳は、南北朝の戦乱と地震による荒廃をきっかけに、自力で始められた修造計画に起源を持つ、とまとめたい。

なお、現在のように毎月 18 日に固定となった時期はわからなかった。今後の課題としたい。

《参考文献》

新城常三「中世参詣の意義と参詣の障碍」（『社寺参詣の社会経済史研究』塙書房、1964 年）
徳永誓子「修験道当山派と興福寺堂衆」（『日本史研究』435、1998 年）
本郷恵子・西田友広・林遼「『大日本史料　第六編之五十一』出版報告」（『東京大学史料編纂所報』58、2023 年）
『藤井寺市史』第 1 巻通史編 1、1997 年
『藤井寺市史』第 2 巻通史編 2、1997 年